

**J**ournal  
of **E**ducation  
Inclusive

Printed 2016.0830  
ISSN 2189-9185

Published by Asian Society of Human Services



*August 2016*  
VOL. **1**

ORIGINAL ARTICLE

# 入院児への余暇・学習支援における学生ボランティアへの期待に関する研究

## Study on the Expectation of the Student Volunteers to Assist in the Leisure and Learning for Hospitalized Children

山下 祥代<sup>1)</sup>(Sachiyo YAMASHITA), 榎木 暢子<sup>2)</sup>(Nagako KASHIKI),  
太田 貴仁<sup>1)</sup>(Takahito OTA), 苅田 知則<sup>3)</sup>(Tomonori KARITA),  
中野 広輔<sup>3)</sup>(Kosuke NAKANO)

- 1) 愛媛大学大学院教育学研究科特別支援教育専攻  
(Graduate School of Education, Special Need Education Department, EHIME UNIVERSITY)
- 2) 愛媛大学大学院教育学研究科  
(Graduate School of Education, EHIME UNIVERSITY)
- 3) 愛媛大学教育学部特別支援教育講座  
(Faculty of Education, Special Need Education Course, EHIME UNIVERSITY)

<Key-words>

病気療養児, 学生ボランティア, ルーブリック評価

(hospitalized children, the student volunteers, rubric evaluation)

skr3322m@gmail.com (山下 祥代)

Journal of Inclusive Education, 2016, 1:54-66. © 2016 Asian Society of Human Services

### ABSTRACT

病気療養児は長期入院により教育からの長期離脱を余儀なくされている。榎木・山下(2014)は、これらの病気療養児への余暇・学習支援として学生ボランティアが有効であるが、参加する学生はその役割理解のために一定の時間や外部からの助言などを必要とすると指摘している。本研究では、学生ボランティアによる病気療養児への余暇・学習支援活動を受け入れている施設職員にアンケート調査を実施し、ボランティアに期待する資質・能力等を分析し、学生が余暇・学習支援活動において自己評価と適切な目標設定が可能である「入院児への余暇・学習支援ルーブリック評価」評価基準(案)を作成した。このルーブリック評価は、「知識・理解」「思考・判断・表現」「技能」「関心・意欲・態度」の4観点について評価基準を設定し、職員が期待する活動や成長をより具体的に記述した。ルーブリック評価により学生ボランティアは早期に役割理解ができるとともに、自身の成長の度合いや現在の到達度を的確に把握することで、余暇・学習支援活動の充実が期待される。今後は学生ボランティアの成長の目安としてルーブリック評価を利用することで、余暇・学習支援活動に生じる変化について検討が必要である。

Received  
2016 / 7 / 27

Revised  
2016 / 8 / 15

Accepted  
2016 / 8 / 17

Published  
2016 / 8 / 30

## I. 問題と目的

### 1. 病気療養児への教育

近年、病期療養児への教育は病気療養児の取り巻く環境の変化に応じてこれまでの体制を変えながら変遷を遂げている。平成6年には「病気療養児の教育について」（文部省，1994）の通知の中で「転学等が完了していない時期にも、実質的には教育を受けられるような配慮が必要」と明記されている。医療技術の進歩に伴って、入院の期間は短い複数回に渡って何度も入院を要する子どもなど治療の方法や、患児の様子は大きく変わってきている。このような状況を受けて、平成25年には通知「病気療養児に対する教育の充実について」（文部科学省，2013）では、平成6年の通知で提示された取り組みの徹底を図ることや退院後も治療や生活規制が必要で通学が困難な者への対応の必要性について述べられている。また、文部科学省の「長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査」では、病気やけがにより、年間延べ30課業日以上入院した児童生徒数（延べ人数）が小中学校を合わせて2,769名であり、そのうち、1,186名の児童生徒に対して「学習指導を実施していない」ことが明らかになった。これは、全体の42.8%に及んでおり（文部科学省，2015）、病気療養による学習空白が生じている。

病気療養児への教育機会の提供方法の1つとして、病院内で活動をしている学生ボランティアが存在する。土居は「ボランティアの中でも特別支援教育関係ボランティアとして重要な役割を果たしているのが、学生ボランティアである」と述べている（土居，2011）。また、「教育改革プログラムについて」（文部省，1997）では「学生のボランティア活動は、大学教育に地域社会の教育力を活用できるとともに、大学が地域社会に貢献できるという教育的意義を有する」と述べられており、病気療養児への教育についても学生ボランティアの活用が有効であると考えられる。

### 2. 療育施設等における学生ボランティアの取り組み

筆者らは2012年からA県内の4つの医療施設等において学生ボランティアによる病気療養児に対する教育機会の提供を行っている。活動は、教育学部に所属する学生が週に1回、2時間程度、個別の余暇・学習支援を行っている。この活動を通して、筆者らはボランティア活動の質の向上のために病気療養児に対する学生ボランティアによる学習支援のあり方を考察してきた。

ボランティア開始1年後に行った受け入れ先の施設等へのアンケート調査では、ボランティア活動導入時のポイントとして、①子どもの健康面や心理面に關する一定の知識があること、②事前の綿密な打ち合わせ、③柔軟に学習支援の内容を工夫することの3点が示された。これらのポイントを押さえた活動を継続することで、職員と学生の間で信頼関係を築くことができ子どもを中心とした学習支援活動を可能とすることが示唆された（榎木・山下，2014）。次に、意識の変容に注目をして、医療施設で病気療養児に対する余暇・学習支援活動を行っている大学生を対象にインタビュー調査を行った。その結果、学生が感じる課題意識はそれまでの生活経験によって異なることが明らかとなった。その内容は時間経過や活動の回数によって変化し、その過程はどの学生においてもある程度同じ道筋であることが示唆された。また、学生の多くは活動についての不安を感じており、その解決のためには相談窓口の設定や情報交換の機会保障が必要であることが示唆された（山下・榎木・井上ら，2015）。これ

らのことから学生ボランティアには学習成果の向上や余暇活動の充実のみではなく、子どもに寄り添い心理的に支える役割もあることが明らかとなった。しかし、学生がその役割に気付き、柔軟な活動を行うためには、一定の期間と、情報保障の仕組みが必要であることが分かった。

藤原(2012)は、様々な学生ボランティア活動の実践報告のまとめとその分析し、ボランティアの関わりとその活動の成果が患児の親や患児に良い影響を与えていると指摘している。しかし、ボランティアを受け入れている職員が学生の成長や子どもに対する影響への期待について調べた研究は見受けられなかった。職員が学生ボランティアに期待していることが明らかになれば、病気療養児に対して余暇・学習支援活動を行う学生ボランティアの役割を明らかにすることができると思われる。

### 3. ルーブリック評価

ルーブリック評価とは、評価観点と評価尺度による評価規準(基準)をマトリックス的に示した評価方法である。富田・近森・中山ら(2005)はルーブリック評価の機能について①学習目標の共有促進、②学習者の自己評価及び改善の促進、③教師の評価観探索促進、④評価の信頼性の向上の4つを挙げている。

ルーブリック評価の機能のうち①～③の機能に注目すると、余暇・学習支援活動を受け入れる職員が期待している学生ボランティアの役割を基に活動目標を共有し、評価や自己目標の設定への寄与が期待できる。そこで、ルーブリック評価の利用を採用した。ルーブリック評価を用いることで、施設職員が学生ボランティアに求めている資質・能力について、明確な評価規準(基準)を示すことができると期待できる。また、学生ボランティア自身がルーブリック評価を用いることで、自分に期待されている資質・能力を適切に把握し、効果的な活動のために具体的な目標を持つことが期待できる。

### 4. 目的

学生ボランティアによる病気療養児への余暇・学習支援活動の役割を明確にするために、受け入れている施設職員を対象にボランティアに期待する資質・能力等に関するアンケート調査を実施し、学生に期待されている資質・能力や活動の展開を明らかにする。

また、学生ボランティアが自身の現状を把握し、適切で具体的な活動目標を立てるツールとして、前述した役割や期待されている事項を基にルーブリック評価基準(案)を作成することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象

本研究の対象は、学生による病気療養児に対する余暇・学習支援活動を受け入れている A 県内の医療・療育施設 2 か所(以下、B 施設と C 施設とする)の職員である。職種は問わず病気療養児と何らかの関わりをもつ職員を対象とした。

## 2. 実施期間

(1) A 施設：2015 年 10 月初旬に配布し、10 月下旬に回収した。

(2) B 施設：2015 年 12 月初旬に配布し、12 月下旬に回収した。

## 3. 実施・回収方法

部署毎に依頼できる部数のアンケートを用意し代表者と通じて配布した。回収は部署毎に取りまとめ代表者に提出してもらい、筆者が訪問して手渡しで受け取った。

## 4. 調査内容

病気療養児に対する余暇・学習支援活動について、下記の内容でアンケート調査を行った。

### 質問項目Ⅰ 回答者プロフィール

- ①職種
- ②就業・所属年数
- ③ボランティア活動受け入れ業務担当の有無

回答方法：選択・記入形式

### 質問項目Ⅱ 余暇・学習支援ボランティア活動の必要性

①生活年齢（「就学前」「小学校期」「中学校期」「高校以降（～20 歳）」による余暇・学習支援ボランティア活動の必要性の違い

②①の回答理由

回答方法：①4 件法（「必要」「状況による」「不必要」「わからない」）

②記述形式

### 質問項目Ⅲ 職員がボランティアに求める経験や知識、態度

- ①（一般/学生）ボランティアに事前に求める知識、態度
- ②（一般/学生）ボランティアに事前にしてほしい経験
- ③（一般/学生）ボランティアに活動を通して求める知識、態度

ただし、身に付けてほしい時期を明らかにするために、①と③の内容は同じものである。

回答方法：7 件法（1：まったく身に付けなくてよい、4：どちらともいえない、7：とても身に付けてほしい）

### 質問項目Ⅳ 職員がボランティア活動に期待する内容や留意事項

- ④（一般/学生）ボランティアに期待する活動の内容
- ⑤（一般/学生）ボランティアに留意してほしい事項

回答方法：7 件法（1：全くそうは思わない、4：どちらともいえない、7：とてもそう思う）

## 5. 分析方法

質問紙への回答に欠損が見られる回答を除いた、B 施設 70 部、C 施設 23 部の計 93 部を分析の対象とした。質問項目Ⅱの回答は、4 件法で得られた回答について各生活年齢別に集計し、記述回答は KJ 法を用いて分類した。質問項目ⅢⅣについては、全ての回答を B 施設、C 施設、全体（B 施設と C 施設の回答を合わせたもの）の 3 つにグループ化した。統計解析ソフトウェア R 用いた。全ての回答は統計処理をして、データの特徴を捉えた。ボランティアに期待されている事項の傾向を知るために、質問項目ⅢⅣの学生ボランティアへの回答に

ついて相関関係を確認し、因子分析を行った。また、学生ボランティアに期待される事項の特徴を考察するために、一般ボランティアと学生ボランティアへの回答を比較検討した。

## 6. 倫理的配慮

代表者には分析時に匿名化し個人は特定されないことなどを書面と口頭で説明し同意を得た。アンケート回答者には紙面で説明した。また、文章の記載時にも匿名性に十分に配慮し個人ならびに施設が特定されないように配慮した。

## III. 結果

### 1. 回答者のプロフィールについて

表1に回収された質問紙における、回答者の職種別人数を示した。

表1 職種別回答者数(人)

	医師	看護師	生活指導員	リハビリスタッフ	計
B施設(%)	2(2.9)	40(57.1)	18(25.7)	10(14.3)	70(100)
C施設(%)	2(8.7)	21(91.3)	0(0)	0(0)	23(100)
合計(%)	4(4.3)	61(65.6)	18(19.4)	10(10.8)	93(100)

このうち、ボランティアの受け入れ業務経験がある職員はB施設13名、C施設7名の20名で全体の21.5%である。業務経験の有無による回答の有意な差がなかったため、B施設、C施設すべての回答を合わせて分析しその結果を考察する。

### 2. 余暇・学習支援ボランティア活動の必要性

図1には子どもの各生活年齢期における、余暇・学習支援ボランティア活動の必要性についての回答を示している。「必要」「状況による」の回答を活動が必要だと考えているグループであると捉えると、中学校期までは95%以上の職員が必要だと考えていた。高校以降には、必要だと考える職員は85%と少なくなっており、10%程度の差が生じている。特に、年齢が上がるにつれて「必要」の回答割合が少なくなっている。また、小学校期にのみ「不必要」の回答がなかった。

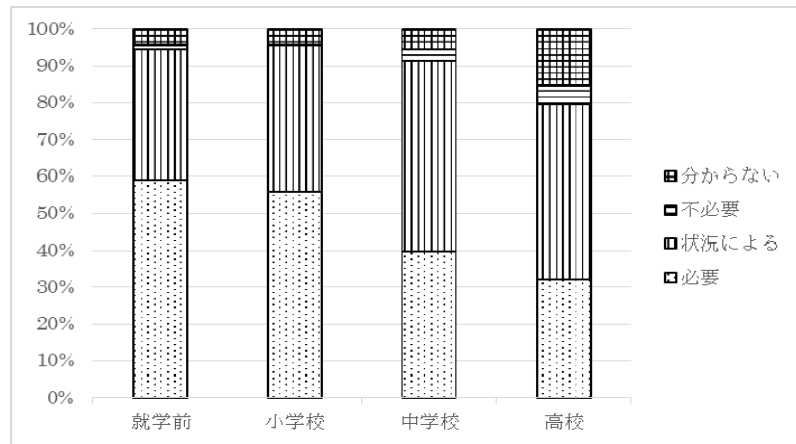


図1 職員が考える生活年齢別余暇・学習支援活動の要不要

#### (1) 回答理由のカテゴリー分類

活動について要不要とした理由を自由記述形式で尋ねた。得られた87の回答についてKJ法を用いて、7つのカテゴリーに分類した。要不要ごとの理由の一部を、カテゴリー別に表2に示した。

7つのカテゴリーは「人手不足」「活動制限」「経験」「発達段階に応じた学びや関わり」「生活年齢に応じた学びや関わり」「ニーズ」「その他」である。

「人手不足」は“子ども数名に対して職員が付くことはできるが、マンツーマンでの学習支援は人員の配置が難しい”“手が回らないこともある”などが挙げられていた。「活動制限」は“安静にするのが難しいので気分転換になればいい”“両親(特に母親)と常に一緒にいるのでお互いストレスがあり、第三者が関わることで軽減できる可能性がある”などが挙げられていた。「経験」は“社会経験の1つ”“ボランティアを通して様々な人と関わり、多くのことを学ぶことができるため”などが挙げられていた。「発達段階に応じた学びや関わり」は“成長発達過程で主要な時期でもあり、外からの刺激も受けた方が良い”“発達段階に応じた活動支援は入院中でも必要”などが挙げられていた。「生活年齢に応じた学びや関わり」は“年齢的に多様な関わりが必要である”“小学校期の学習支援は、今後社会生活を送っていく上でとても大切なことだと思う”などが挙げられていた。「ニーズ」では“年齢が上がるにつれ、復学までの支援は必要”“思春期ごろになると本人の意思も考慮する必要がある”などが挙げられていた。

#### (2) 回答と各カテゴリーとの関係

余暇・学習支援活動を必要だと考える職員の多くは「人手不足」や入院による「活動制限」、または「経験」の偏りや少なさに課題を感じていた。状況によると回答した職員は、「発達年齢に応じた学びや関わり」や子どもの「ニーズ」など対象児に注目をした理由が多かった。

表2 余暇・学習支援活動の要不要別の回答理由（一部抜粋）

回答	回答理由
活動は必要である	<p>&lt;人手不足&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員は自分たちの看護業務があるため、遊びや学習に関わる時間がない。</li> <li>・ボランティアの人たちがいれば職員が数名付き添って外出もできる。</li> </ul> <p>&lt;活動制限&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人のペースにもよるが、学校や施設での関わりにも時間の制限や限界を感じる。</li> <li>・1日ベッドで過ごすためストレスが溜まってしまう。</li> </ul> <p>&lt;経験&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院生活が長期で人間関係を作るのが難しい子どもたちがいる。</li> <li>・外部との交流になる。</li> </ul> <p>&lt;発達段階に応じた学び&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各年代それぞれで必要とする方は見られるので基本的に必要性はある。</li> </ul> <p>&lt;ニーズ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習支援ボランティアは必要だと思う。</li> <li>・入院ではさみしい思いをしていて年齢に関わらず何らかのかかわりを欲している児達が多い。</li> </ul>
活動は状況によって必要である	<p>&lt;人手不足&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・職員の人数が少ないこと、業務が忙しく児との関わりがもちにくい場合は必要。</li> </ul> <p>&lt;経験&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちにとっても関わり手が多くあった方が良い。</li> <li>・勉強や遊びの機会を持てることは大事</li> </ul> <p>&lt;発達段階に応じた学びや関わり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入院中に関してもその子一人ひとりの状況によってくると思われる。</li> <li>・子どもの状況や段階にもよると思われる。</li> <li>・身体機能面、知的面も把握できている者が関わった方が良いと思う。</li> <li>・個人の能力や障害度によって対応が個別になるので。</li> </ul> <p>&lt;生活年齢に応じた学びや関わり&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢による差異も一概には言えないため。</li> <li>・年齢によって必要なものが異なる。</li> </ul> <p>&lt;ニーズ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの必要に応じて。</li> <li>・入所児者それぞれの求めているものが違う。</li> <li>・余暇・学習支援ボランティア活動は、入院期間や学習の進捗状況、本人の希望などの状況が考慮されなければ、義務的になってしまう可能性がある。</li> <li>・ボランティア活動は誰かに強制されて行うものではないと思うので、情報提供は大人がしても、どうするかは本人次第で良いと思う。</li> </ul>

### 3. ボランティア活動受け入れ施設職員が学生ボランティアや活動に期待する事項

職員がボランティアに期待する資質・能力や活動の内容を、表3に示した項目を用いて尋ねた。回答は「とても当てはまる（身に付けてほしい）」を7、「まったく当てはまらない（身に付けなくてよい）」を1とした7件法を用いた。B施設、C施設ともに回答をまとめて因子分析を行い分析した結果、5因子が抽出された。各因子の因子負荷量を表4に示した。第1因子は“事前に活動に期待して取り組む”“活動を通して教育技法に関する知識を得る”など6項目で「活動上の留意点」と命名した。第2因子は“子どもの心理面を理解するための知識を身に付ける”“長・短期的な計画を立てて活動する”など8項目で「活動の内容」と命名した。第3因子は“これまでに病気の子どもと関わった経験の有無”“活動の継続”など5項目で「活動の取り組み」と命名した。第4因子は“施設の役に立ちたい”“活動から知識や技能を得たい”といった4項目で「意欲」と命名した。第5因子は“病気や障害の状態を理解するための知識を身に付ける”の2項目で「病気、障害の知識」と命名した。

表5に因子間の相関係数について示している。「活動上の留意点」因子と「病気、障害の知識」因子で0.645、「活動の内容」因子と「病気、障害の知識」因子で0.504、「意欲」因子と「病気、障害の知識」因子で0.502の正の相関がみられた。



表3 学生ボランティアや活動に期待する事項

質問項目		身に付けてほしい内容	
III めめる 経験や知識、 態度 職員がボラン ティアに求 める	① ② 事前に	A1	病気や障害の状態を理解するための知識
		A2	衛生(手洗い、マスクの着用など)に関する知識
		A3	教育技法に関する知識
		A4	子どもの気持ちを理解するための知識
		A5	活動する施設の役に立ちたいという気持ち
		A6	活動から知識や技能を得たいという気持ち
		A7	子どもと一緒に楽しみたいと期待する気持ち
		A8	過去に病気の子どもと関わった経験
		A9	過去に子どもに勉強を教えた経験
		A10	過去に他のボランティア活動に参加した経験
	③A1～A7と同様の内容で、「活動を通して」身に付けてほしい事項を B1～B7とした		
IV 職員がボラン ティア活動に 期待する 内容や留意事項	④ 内容	C1	長期的な計画を立てて活動をしてほしい
		C2	短期的な計画を立てて活動をしてほしい
		C3	子どもが達成感を感じるような活動をしてほしい
		C4	次回の活動を期待するような展開を用意してほしい
		C5	子どもの不安が軽減するような関わりをしてほしい
		C6	子どもの気分転換になるような活動をしてほしい
		C7	活動を1年以上続けてほしい
		C8	活動日の急な変更は行わないでほしい
	⑤ 留意点	D1	事前に活動内容を病棟スタッフと相談してもらいたい
		D2	活動中気付いたことは病棟スタッフに報告してほしい
		D3	病棟スタッフとボランティアとで定期的に情報交換をしたい
		D4	定期的に医療関係者から指導助言を受けてほしい
		D5	定期的に教育関係者から指導助言を受けてほしい
		D6	病院で知り得た情報を外部に漏らさないでほしい

因子分析の結果をもとに、各因子における詳細な分析を行った。

(1) 第1因子：活動上の留意点

衛生に関する知識は活動前から一貫して中央値7で、データの散らばりが小さいことからほとんどの職員が習得することを期待していることがうかがえる。職員への報告や相談、情報の守秘義務については関心が高く同時に期待度も高いことが分かる。特に相談と守秘義務については、ほとんどの職員が同様に必須だと考えている。

(2) 第2因子：活動の内容

学生ボランティアが活動を行うとき期待されていることは、活動を通して子どもの心情理解や教育技法についての知識を身に付けることである。また、活動は計画を立てて子どもが達成感や期待感を感じられるものであることが期待されている。

(3) 第3因子：活動の取り組み

参加学生のこれまでの経験については特に希望はないことがわかった。

(4) 第4因子：意欲

施設の役に立ちたいという気持ちで参加をした学生にも、活動を通して子どもたちと一緒に楽しみたいという気持ちを感じられるように期待されている。

## (5) 第5因子：病気、障害の知識

活動開始前から、病気や障害に関する知識の習得に関する期待は高いものの、活動を通してより身に付けてほしいと期待されている。

表4 質問項目の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
A7	0.655				
B2	0.527				
D1	0.744				
D2	0.900				
D3	0.420				
D6	0.896				
A3		0.610			
A4		0.658			
B3		0.563			
B4		0.429			
C1		0.522			
C2		0.515			
C3		0.879			
C4		0.848			
A8			0.912		
A9			0.816		
A10			0.931		
C7			0.559		
A5				0.637	
A6				0.610	
B5				0.846	
B6				0.797	
A1					0.816
B1					0.846
寄与率	0.154	0.135	0.114	0.090	0.064
累積寄与率	0.154	0.289	0.403	0.493	0.557

表5 因子間の相関係数

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
因子1	1.000	0.349	-0.368	0.350	0.645
因子2	0.349	1.000	-0.358	0.286	0.504
因子3	-0.368	-0.358	1.000	-0.260	-0.380
因子4	0.350	0.286	-0.260	1.000	0.502
因子5	0.645	0.504	-0.380	0.502	1.000

#### 4. ルーブリック評価における各基準の設定

ルーブリック評価は「知識・理解」「思考・判断・表現」「技能」「関心・意欲・態度」の4つの観点から評価基準を作成している。それぞれ4観点到相関係数を基に因子を当てはめた上で、自由記述から読み取れた傾向を含めて評価基準の内容を設定した。表6に作成した「入院児への学習・余暇支援ルーブリック評価」評価基準(案)(以下、入院児学習支援評価基準(案))を示した。

##### (1) 知識・理解：「活動上の留意点」因子、「活動の内容」因子、「病気、障害の知識」因子

「病気、障害の知識」因子が各因子と相関があるのは、病気や障害の理解は活動を行う上で前提となるからだと予想される。衛生に関する知識は活動前から一貫して高く、活動中も対象児に応じて対応をすることが求められている。自由記述では、子どもたちの生活環境がストレス負荷となっていることを懸念している意見も多く、生活環境が子どもの心理面に影響を与えていると予測される。知識が活動の基礎となることから、活動の対象が病気療養児で、活動の場が療育施設等であることが重要だと考えられる。このことから、表6の知識・理解を設定する。

##### (2) 思考・判断・表現：「活動上の留意点」因子、「活動の内容」因子、「病気、障害の知識」因子

思考するときには、もっている知識を活用することから、「思考・判断・表現」の項目は「知識・理解」と深い関連があると言えるため、各項目①-④、②-⑤、③-⑥は関連させて項目立てた。活動を通して病気や障害の理解を深めることが望ましいのは、教科書的な理解ではなく、子どもの状態に応じた理解が必要とされているためであると考えられる。また、生活環境や治療の進捗状況を含めて子どもたちの気持ちや状態を理解し、子どもに寄り添った活動が必要とされている。

また、子どもと密に関わる学生は活動を通して多くの情報を得ると考えられる。定期的に活動する学生だからこそ見ることができる子どもの様子も多々あると予想され、職員にとって学生からの報告は重要度が高いので、情報の共有は必要である。しかし、子どもの様子も含め活動で知り得た情報の管理は特に重要で、個人情報を外部に漏らさないことは絶対条件である。このことから、表6の思考・判断・表現を設定する。

##### (3) 技能：「活動の内容」因子

特に学生ボランティアは短期的な計画を立て、子どもが達成感をもって、次回の活動を期待できるような活動を展開することが期待されている。活動を行うだけではなく、個々が必要とする内容を、心理的状況を踏まえて設定することが必要だと考えられる。このことから、表6の技能を設定する。

##### (4) 関心・意欲・態度：「活動の取り組み」因子、「意欲」因子、「病気、障害の知識」因子

活動前のボランティア経験の有無は重要視されておらず活動を通しての成長が期待されている。また職員はボランティアには子どもたちと楽しみたいという気持ちが必要で、活動を通して学生自身が積極的に学ぶ意欲をもつことを期待している。職員の余暇・学習支援活動を必要だと考える理由には、病気療養児にとって施設のスタッフ以外の人と関わりをもつことが重要だというものがあった。学生ボランティアは余暇・学習支援者としての専門性を磨いていくことが期待されているだろう。このことから、表6の関心・意欲・態度を設定する。

## 5. 第3者による「入院児への学習・余暇支援ルーブリック評価」評価基準（案）の評価

特別支援教育を専門とする大学教育関係者の2名から、最初に作成した入院児学習支援評価基準（案）の基準内容について評価を受けた。なお、表6には指摘された点を考慮し修正した入院児学習支援評価基準（案）を示している。

表6 「入院児への学習・余暇支援ルーブリック評価」評価基準（案）

	A	B	C
知識・理解	①対象児の病気や障害の特性、治療の状況を資料がなくても概説できる。	対象児の病気や障害の特性、治療の状況を資料があれば概説できる。	対象児の病気や障害の特性、治療の状況を資料があっても概説できない。
	②対象児の心的ストレスを踏まえて、気持ちの変化とその根拠を理論的に説明できる。	対象児の心的ストレスを踏まえて、気持ちの変化を理論的に説明できる。	対象児の心的ストレスによる気持ちの変化を説明できない。
	③衛生の配慮に関する行為(手洗い、マスクの着脱など)を資料がなくても正しい方法で行い、説明できる。	衛生の配慮に関する行為(手洗い、マスクの着脱など)を資料がなくても正しい方法で行うことはできるが、説明することは難しい。	衛生の配慮に関する行為(手洗い、マスクの着脱など)を資料があれば正しい方法で行うことができる。
思考・判断・表現	④対象児の病気や障害の特性に応じて具体的な活動の様子を予想し、適した活動を考えることができる。	対象児の病気や障害の特性に応じて具体的な活動の様子を予想するが、適した活動が思いつかない。	対象児の病気や障害の特性に応じて具体的な活動の様子を予想することができない。
	⑤対象児の気持ちの変化に応じて、関わり方や活動を適切に変化させることができる。	対象児の気持ちの変化に気付くが、関わり方や活動を変化させることが難しい。	対象児の気持ちの変化に気付くことが難しい。
	⑥対象児の治療の状況に応じて、必要な衛生面に関する配慮を判断し、活動中も留意することができる。	対象児の治療の状況に応じて、必要な衛生面に関する配慮を判断するが、活動中に留意することが難しい。	対象児の治療の状況に応じて、必要な衛生面に関する配慮を判断することが難しい。
	⑦活動中に見られる子どもの様子や態度の中で、気になったことは必ず何らかの方法で報告している。	活動中に見られる子どもの様子や態度の中で、気になったことを機会があれば何らかの方法で報告している。	活動中に見られる子どもの様子や態度の中で、気になったことを報告することはほとんどない。
	⑧活動の場で知り得た個人情報はSNSを含めて外部へ漏らすことはなく、関係者との活動の相談や報告の際にも個人情報情報が漏れないように配慮できる。	活動の場で知り得た個人情報はSNSを含めて外部へ漏らすことはないが、関係者との活動の相談や報告の仕方が分からない。	活動の場で知り得た個人情報はSNSを含めて外部へ漏らしてはいけないことは分かっているが、どの情報が個人情報に当たるのか分からない。
技能	⑨対象児の心理面を踏まえて短期目標を考え、活動に反映させている。	対象児の心理面を踏まえた短期目標を考えるが、活動に反映させることが難しい。	対象児の心理面を踏まえて短期目標を考えることが難しい。
	⑩対象児のニーズに応じて心理的満足感を得られる、遊びや教材・教具を考案することができる。	対象児のニーズに応じた、遊びや教材・教具を複数考案することができる。	対象児のニーズに応じた、遊びや教材・教具を少なくとも1つは考案することができる。
関心・意欲・態度	⑪下記の項目について、7個以上当てはまればA、4～6個当てはまればB、3個以下に当てはまればCとする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・活動で知った言葉や子どもの行動の意味を周囲の人に聞いて理解しようとしている。</li> <li>・活動で知った言葉や子どもの行動の意味を書籍を読んで理解しようとしている。</li> <li>・活動で知った言葉や子どもの行動の意味をインターネットで調べて理解しようとしている。</li> <li>・授業等で得た知識を活動の内容や子どもとの関わり方に関連付けようとしている。</li> <li>・大学関係者からの指導助言を自ら依頼して受けている。</li> <li>・大学関係者からの指導助言を受ける機会があれば毎回参加している。</li> <li>・毎回の活動を自分なりにまとめて省察を行っている。</li> <li>・活動内容の悩みは相談したり、第3者の評価を受けたりしながら解決を図ろうとしている。</li> <li>・病気療養児に関する知識がある人と相談してより良い関わり方を見出そうとしている。</li> </ul>		

指摘された点は以下の通りである。まず、1点目は「関心・意欲・態度」の評価について、他の項目のような3段階評価では十分に測ることは難しいのではないだろうかということである。気持ちや態度に関しては多くの要素が関連していることや、他者からは見えづらいことが考えられるため、9つの項目を挙げて該当する個数を基に評価するという方法を採用ことにした。

2点目は、今回は評価基準作成のための調査対象が医療・福祉施設の職員のみであるため内容の偏りや専門性の不確かさが考えられるのではないだろうかということである。特に、「知識・理解」や「技法」では教育的な立場からの意見を反映させることが必要であろう。また、修正した入院児学習支援評価基準（案）について、調査依頼した医療関係者に提示したところ、活用可能性があるだろうと、口頭での評価を受けた。

#### IV. 考察

先行研究で子どもに寄り添い心理的に支える役割があることが明らかであったように、本研究でも活動を通して対象とする子ども自身について理解を深め、子どものニーズや身体的、精神的な環境に応じた関わりを考えることが必要とされていた。しかし、職員の意識の中では、事前に身に付けて活動に臨んでほしい事柄と、活動を通して学んでほしい事柄といったように優先度が異なっていることが示唆された。今回作成した入院児学習支援評価基準（案）はこのような職員の期待を取り入れて評価基準を作成している。学生ボランティアにとって、この入院児学習支援評価基準（案）を参考にすることが活動や自分たちの役割を理解する手がかりとなると同時に、現在の達成度について正しい自己理解と適切な自己目標を立てることが期待できる。特にルーブリック評価はその機能から、活動開始間もない学生でも評価が可能であり、開始後できるだけ早い段階で入院児学習支援評価基準（案）を用いて学生に自己評価をしてもらうことで入院児への支援の効果を高めることに役立つであろう。また、職員は活動を通して学生が成長することを期待している傾向にあるが、ルーブリックを用いることにより成長の度合いが可視化され、学生ボランティア活動への期待感やより有益な活動展開へとつながることが期待される。

本研究では、病気療養児と関わりのある医療関係者からのニーズ調査を行った。子どもたちの生活の場である医療現場からの期待が明らかになったことは、より子どものニーズに近い活動展開が可能になる。また、実際に受け入れている現場からの意見を参考に今後の活動展開について検討することで、医療現場でより受け入れやすい活動となれば病気療養児への余暇・学習支援活動の定着や広がりへとつながることが期待される。

#### V. まとめと今後の課題

子どもにとって有用な活動とするためには、学生ボランティアが自己の現在の力を把握し、適切で具体的目標をもつことが必要である。学生ボランティアと施設職員が入院児学習支援評価基準（案）を用いて活動の評価基準を共有することは、学生ボランティアの活動をより有益な活動に発展させていくことが期待できる。今後は、入院児学習支援評価基準（案）による学生ボランティアの成長を施設職員と共通理解できるシステムの検討が必要になってくるだろう。

作成したルーブリック評価の基準内容については、実際に病気療養児への余暇・学習支援活動を行っている学生に、入院児学習支援評価基準（案）を用いて自己評価を行ってもらい評価基準を精査することが必要である。また、第3者評価でも指摘されたように、今回は医療的視点から期待や要望を踏まえて評価内容を作成している。内容の充実とバランスを考えると教育的視点から検討をすることが必要となる。

病気療養児の学習空白期間への対応はまだ未整備であり、公教育による学習保障の補助手段として、学習ボランティアの充実は当面の課題である。今後は入院をしている児童生徒の教育的ニーズをさらに明らかにするとともに、入院児学習支援評価基準（案）を用いることによる学生ボランティアの成長過程や活動の変化を検討することで、ボランティアの活用について知見と積み重ねていきたい。

## 付記

この研究は平成 27 年度 愛媛大学教育改革促進事業「インクルーシブ教育システム化において、児童生徒の健康問題に適切に対応できる教員養成カリキュラムの開発」による研究成果の一部である。

## 文献

- 1) 文部省(1994) 病気療養児の教育について.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19941221001/t19941221001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19941221001/t19941221001.html)
- 2) 文部科学省(2013) 病気療養児に対する教育の充実について(通知).  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1332049.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1332049.htm)
- 3) 文部科学省(2015) 長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の結果.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/1358301.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1358301.htm)
- 4) 土居正博(2011) 特別支援教育関係ボランティアの課題と解決の方途—プロセスレコードの活用の可能性—. 創大教育研究, 21, 171-182.
- 5) 文部省(1997) 教育改革プログラムについて.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/t19991015001/t19991015001.html](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19991015001/t19991015001.html)
- 6) 檜木暢子・山下祥代(2014) 病気療養児に対する学生ボランティアによる学習支援の可能性. 愛媛大学教育学部紀要, 61, 161-169.
- 7) 山下祥代・檜木暢子・井上和・太田貴仁(2015) 病気療養児に対する余暇・学習支援学生ボランティアの成長過程と育成の方策(1)—学生ボランティア参加者に対する聞き取り調査の考察—. 日本発達障害学会第 50 回研究大会.
- 8) 藤原志帆(2012) 病院ボランティアによる入院児の支援に関する考察—小児医療における病院ボランティアの活動報告の分析をとおして—. 熊本大学教育学部紀要, 61, 153-162.
- 9) 富田英司・近森憲助・中山晃・大谷千恵・山本昭夫・小野由美子(2015) 国際交流プログラムを評価するルーブリックの開発. 大学教育実践ジャーナル, 13, 9-15.

## - Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA  
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA  
National Institute of Vocational Rehabilitation  
(Japan)

Eonji KIM  
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON  
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI  
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI  
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI  
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI  
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE  
Kio University (Japan)

Kohei MORI  
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN  
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA  
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO  
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI  
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA  
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA  
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA  
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA  
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI  
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA  
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI  
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA  
Joetsu University of Education (Japan)

## Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

## Journal of Inclusive Education

**VOL.1 August 2016**

© 2016 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education  
VOL.1 August 2016  
*CONTENTS*

**ORIGINAL ARTICLES**

- The Measurement of Educational Assessment and Psychology, Physiology and Pathology for Children with Physical Disability, Health Impairment .....Haejin KWON, et al. 1
- Effects of Weekday Café Program in Special Needs School; Using by Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)..... Yoshimi CHINEN, et al. 11
- Redefinition and Construct of Diversity Education..... Changwan HAN, et al. 19
- Remembering the Past Autobiographical Memories and Imaging the Future in an Adult with Amnesic Syndrome; The Role of the Involuntary Memory .....Mikio HIRANO, et al. 28
- Study for Construction of the Individual Education Support Model: Based on IN-Child Record ..... Mamiko OTA, et al. 35
- The Influence of the Degree of Others/Self-understanding of the Social Interaction in Children with ASD ..... Toru SUZUKI, et al. 48
- Study on the Expectation of the Student Volunteers to Assist in the Leisure and Learning for Hospitalized Children ..... Sachiyo YAMASHITA, et al. 54
- The Verification of the Reliability of the SNEAT10; The Study of Screening Scale for Inclusive Needs Child .....Aiko KOHARA, et al. 67
- Social Psychological Study for Motivations of Supports for Developmental Disorders by Members in Workplaces .....Hiroataka KUWAKI, et al. 74
- Description of Disability in the Sub-textbook on Morals for Elementary School Students ..... Atsushi TANAKA, et al. 85
- The Discrepancy in Members' Participation Purpose in the Self-help Group of Person with Disabilities and His/Her Family that Continues for Many Years: A Case of the Group for Down's Syndrome ..... Takahito MASUDA, et al. 92
- Current Situations and Issues of the Education for Disability Understanding in Higher Education ..... Haejin KWON, et al. 104
- Performance Analysis of Diversity Management using the Balanced Scorecard: Case Study of Japanese Companies Employing Disabled and the Elderly .....Moonjung KIM 114

**REVIEW ARTICLES**

- Special Needs Education in School Education Act and Services and Supports for Persons with Disabilities Act ..... Ryotaro SAITO 124
- Executive Function and Brain Pathology in People with Intellectual and Developmental Disabilities ..... Yoshifumi IKEDA 132
- Research Trends on Educational Support and Psychological Characteristics of the Children with Physical Disabilities ..... Kohei MORI 140
- Special Needs Education in The Elementary School Government Guidelines for Teaching and Nursery Childcare Indicator..... Ryotaro SAITO 146
- Basic Study about Development of the Education for Disability Understanding Index; Based on the Inclusive Education.....Haena KIM, et al. 155
- Current Situation and Issues Related to Organization of the Education Curriculum and Devising of Educational Treatment of Children with Health Impairments..... Kohei MORI 164

**PRACTICE REPORT**

- A Report of the Project of Establishment of Educational Security Center for the Long-term Hospitalized Children in Ehime Prefecture..... Kosuke NAKANO, et al. 170

Published by  
Asian Society of Human Services  
Okinawa, Japan